海外友好都市ドナウエッシンゲン市交流学生派遣

異文化の世界へ

～５人の学生が見たもの

ドイツ・ドナウエッシンゲン市と海外友好都市の盟約を結んで今年で12年。毎年、両市の学生訪問団がホームステイを通して交流を深めている。今年も、５人の学生たちがド市の学生たちと絆（きずな）を深め、８月９日、上山に帰ってきた。

旅立ったのはその11日前の７月30日。12時間の長いフライトを経てド市に着いた５人はド市役所で歓迎を受け、ホストファミリーのもとへ。ド市への強い好奇心もあったが、「言葉が通じるかが心配だった」。

しかし、その心配はド市の人たちの温かい人柄で解消された。「身振り手振りと後は、伝えようとする心があれば、通じた」と、全員が同じ感動を口にした。

滞在中は、フライ大市長を表敬したり、市内保育園を訪問したりなど、たくさんの人たちと交流。ホストファミリーとも、日本では体験できない多くの思い出と感動を胸に刻んできた。

「自分の意思をしっかりと伝える大切さを知った」。５人がこの旅で成長したことのひとつ。ド市での体験はしっかりと彼女たちを成長させ、その表情には「自信」があふれているように見えた。

普段とは異なる世界で、自分の生活を、自分自身を見つめ直した彼女たちの瞳は、キラキラ輝いていた。

宇藤優花さん（旭町）

言葉が通じないというのは不安でした。でも、それが何とかコミュニケーションをとらなくてはと、自分を積極的にさせたし、コミュニケーションには、言葉よりも「話を聞こう、伝えよう」とする心を持つことが重要だと知りました。

田中　優さん（下新丁）

ドイツ人は、家族の時間をとても大切にしていました。夕食は家族全員で食卓を囲むのが当たり前で、夕食後も必ず家族で会話を楽しんでいました。ゆとりのある生活の大切さを感じるとともに、わたしも家族との時間・会話をこれまで以上に大切にしようと思いました。

髙橋恵利夏さん（朝日台）

訪問中は度々将来のことについて尋ねられました。ド市の学生の多くは、具体的な将来の目標を持っていました。わたしも将来の目標をしっかりと考え、そしてそれに向かって勉強に取り組むことが必要だと感じました。

井上優花さん（長清水１）

ド市での出来事が楽しくて夢のように感じています。昔ながらの街並みはとても美しく、その景観を守ろうと、街中の人たちが同じ意識・考えを持って、まちづくりを進め、生活していることに驚きと素晴らしさを感じました。

佐藤早苗さん（楢下）

同じ先進国でも、環境への配慮の違いに驚きました。住宅街では、ソーラーパネルのある家が多く、山合いには風車がありました。店ではみんな、買い物袋を持参していました。わたしも、環境のためにできることから取り組もうと思います。

ド市にあるドナウ川の源泉「ドナウの泉」。その側には、斎藤茂吉の歌碑が建立されている

飲食店で折り紙を友人に教えていたら、周りのお客さんも興味津々。「折り紙教室」みたいに

フライ大市長と（写真左から２人目）。ハンガリーなど他の３か国の学生訪問団と一緒に訪問した

ド市役所に到着すると、ホストファミリーたちなどが熱烈に歓迎してくれた